

# 白選五十首



## 森山晴美

もりやま・はるみ 1934年、東京都生まれ。東京教育大学国文科卒。高校教師を長くつとめ、教科書編集、海外子女教育などにもかかわる。作歌は高校時代に「新暦」入会、紆余を経て現在、代表。歌集は大学歌人会刊の『鋭い街』を含め、最近の『森山晴美歌集』まで6冊。賞は、ながらみ短歌賞など。

雨は降りつつ明るき昼を君と歩み新橋へ出る道にまどひぬ

あかるき昼のひかりのなかに眼つむれば奔流をなして色とかたち見ゆ

君は嘘を言ひゐると思ひつつ顔挙げてやさしき微笑灯に向けゐたり

ためすごとき思ひに日々を逢はずゐる春近き街の風荒れてをり

たずさへ来し白紙の手紙 旅に出て心いちづに傾くを待ち

草に臥す眼よりも高くいちめんに吾亦紅の紅そよぎてをりぬ

私がわたくしで無ければ遂げ得たる愛かもしれず瓶の花散る

とめどなく花びら降らす雪柳その美しさ費ひきるまで

空をわたる魚群となりて大櫂をのがれゆけ幾万の梢の若葉

夜の更けし団地のどこか底ごもる轟きながく水放つ音

水道管の闇をひしめく水流は光りもならず鳴りつつ急かる

『鋭い街』

『わが毒』

むかしの自分の歌を読むと、こうしてその折々の気持ちに歌に残しておいてよかったと思うが、実はすべてを十分に歌いとどめたとはまでは言えなくて、言葉の技術も伴わないから、表現できる範囲でしか表現してないのがある（今だってそうだが）。それでも一つ一つの歌によって鮮明に蘇る風景や心情があるのは写真のスナップに似ている。

『鋭い街』は昭和二十年代後半の作で、一首目が大学時代、次のが高二のときの歌である。習作期なのでナイーブな二首を選んだ。

『わが毒』は書名が論議されたが、今見ると意識過剰だったんだなあ、という程度のことである。でもその意識過剰というか、心理の乱気流に悩んだから歌ができたわけで、それ

生活の核のごときをまさぐりつついつまで続く中途半端ぞ  
このごろの私の驕りを知るらしき夫が芝生の子に降りてゆく  
ハンドルをきりすぎ戻しゐるとき振幅のなか私のバランス  
流行歌にこころの酔ひて涙さへふと浮かびたるわれに愕く  
いま浸るこの寂しさもはかなしと躲すごとく仰ぐ風花のそら  
帽を顔に載せれば帽の内側の匂ひて苦し己れといふは  
鉄柵のうちにあらくさ弄けば草百態をおもひて通る

雨に倦む子と出で来たり公園に濡るる遊具を見て帰るかも

上向きに鋳落ちてゐる家具の隙かかる寂けさか死後の世界は  
すぎゆきの恥のごとくも岩陰に船虫はわつと群れてるにしか  
人を愛する眼は青く人を憎む眼は赤なりと聞けば畏るる

山に寝る一夜頭上の玻璃窓に貼られて月を浴びしハンカチ  
紅梅の咲くは罪にあらじかし一樹に満ちて葉もくれなる  
船晦し船晦しつづ溜めゆくは澱のごとしも蜜のごとしも

若き同僚われを怖ると聞きてよりこの寂しさの味はひ深し  
柔らかく打ち消しながら後さきを繋ぐ理窟を考へてゐる

四カ月前のバレエの公演を見むと言はれても虹のやうなり  
ラディカルなこころを秘めてうらうらと静もる桜のやうな人も

遠く在りてまれまれにわが想ふとき微かなる風その耳に吹け  
大理石の柱を肩に支へ立つギリシャ女神の春の列像

「畑中の胡桃の木」

が青春というものだった。もつと早い時期に  
まとめておけば、もつと青春性が濃いものにな  
ったかもしれない。後半で歌が変わり、生  
活の探求という意識が生まれていると思う。

「畑中の……」は穏やかな書名にしたが、中  
身は決して穏やかなものではなく、すこしで  
も何かを掴みたいという気持ちが強くあつた。  
中年の驕りの深まりと、裏腹の豊饒さが添つて  
いれぱと思う。この歌集を出したときは所属  
を持たず、孤立感があつたので、それを埋め  
るため三人の人に長文の批評を依頼した。こ  
れは以後の作歌に大変役立ち、自立してやつ  
てゆく心の拠り所の一つとなつた。

「月光」から「グレコの唄」の時期は仕事も  
大変になり、親の介護も重なって、歌どころ  
ではなく過ごした。しかし文学というのは違  
和感や現実の矛盾から生まれるという戦後の  
考えが根にあつたので、生活の現実がそのま  
ま歌の好個の素材になつた。この自選では職  
場の歌はごく少数にとどめているが、その辺  
に私らしい歌があるのかもしれない。

五十首選び終わり、「こころ」という言葉  
を意外に多く使っているような気がして数え  
たら四首あつた。歌を通して自分という人間  
をみつめ、周囲をみつめてきた証かもしれぬ。  
現在の私は一生で最も自由な境涯に入った。  
未知の領域に遊ぶことが楽しみである。

「月光」

訂正をするほどのことと思はずにうち置きしこと手痛くかへる

若き医師に恍惚答ふる声止みて出でし老の顔の平凡

つげ義春読めば搏たるる品格のある貧乏といふはこれならむ

二寸ほど常に襖の開きあるは言ひがたき姑の心にあらむ

家居して小さき昼餉に対ふかなここを何処と判らぬははと

個性強くおのおのに動く幾人をゆるく包みて小組織あり

引き出せる半ばの紙がのぞきぬるティッシュの函はいつも宙づり

風呂敷のすたれたる世に逆らひて胸に畳める布取りいだす

言ひたいことがあると前にきて眼を据ゑぬ酔に紛らせ何にても言へ

遙々と来て間に合ひし都庁なれ昇りゆき氣づく書類ミス一つ

押せば退き水のごとしと我を言ふさなり水なり変幻もする

「グレコの唄」

さんさんと舗道打つ雨この秋は京都で濡れて横浜で濡る

「ろくでなし」持ち歌としていづこにも属さぬ我を裡に持つなり

わが職の虚業に似ると職人の男の動きすがしみて見る

読みさしてかたへのページ開くとき微かな段差われを啓くも

父母の亡きを日頃はおもはねど青葉若葉の平ぎ寂し

職退きてすこし解けし心なれまだ庭に手を付ける氣がせぬ

若きひと帰りし後を立ちゆきて魔法瓶より白湯すこし汲む

混雑のすこしゆるみてドアかげにページをめくる女の手が見ゆ